

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：12701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25870241

研究課題名(和文)カリキュラム(単元)構成ワークショップの理論構築と企画実践

研究課題名(英文)Theory Constructions and Planning Practices of the Curriculum(Unit)-Construction Workshops

研究代表者

金馬 国晴(Kimma, Kuniharu)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：90367277

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：カリキュラムを実際に構成するワークショップを「単元習作」と呼んで企画、実施するとともに、その意義や方法に関するメモを蓄積して論文や理論を構築した。その参考とすべく、戦後初期のコア・カリキュラム他を研究し、並行して学会大会、研究会・講演会・シンポやワークショップ、教員サークル等にも参加し、実際に各教師がカリキュラム計画の構築力を養成できるワークショップの多様な形態へと集大成していき、そうすることで経験、情報、知見を蓄積することができた。以上が総合学習、カリキュラム、学力、学習指導要領検討、実践記録分析等の考察に活用できるとわかり、雑誌論文や共著、大学テキスト、学会発表原稿などを仕上げた。

研究成果の概要(英文)：I organized workshops where curriculum are consisted which can be called "Tangen Shusaku(unit etude)". Memoranda on its significance and ways have been accumulated, and papers and theories have been built. Core Curriculum in early postwar period and others have studied for its references. And I have participated in academic meetings, research councils, lectures, symposiums, workshops and teacher clubs, etc. concurrently. And these have been compiled to workshops of the various forms so that the respective teachers can train the building abilities of the curriculum plan. Experiences, information and knowledge have been accumulated by doing that. It's said that the above can utilize for consideration about the integrated studies, curriculum, academic achievement, examining course of studies, analysis of practice records, etc. And I have completed journal articles, a book, a university text and academic meeting announcement manuscripts.

研究分野：教育学

 キーワード：カリキュラム構成 ワークショップ 単元習作 コア・カリキュラム 学力 つくる リソースセンタ
 システム思考

1. 研究開始当初の背景

すでに、修士論文から二件の科研費若手研究(B)に至るまで、戦後初期のコア・カリキュラムを歴史的・理論的に研究してきた。今研究では、さらにこれを理論構築に至るまで発展させるとともに、現在の教師のうちに「カリキュラム構成力」を養成する研修方法やその一つとしてのワークショップに関する研究、その企画・実践へと踏み出していく。

前研究、とくに元教師インタビューの過程で、戦後初期からワークショップ型の研究集会や自主的な教員サークルが始まり、重要な役割を担ったと知った。(戦後初期の IFEL = 教育指導者講習、そしてコア・カリキュラム連盟(コア連, 1948-53)、その後身の日本生活教育連盟(日生連, 1953-)、全国青年教師連絡協議会(全青教, 1953-62)他)

とくに注目できるのは、カリキュラムの図表を共同で描き合った全国的な研究集会(それ自体がワークショップを訳した語であった)の分科会や地域サークル、校内研修、とくに実際にある単元を共同で試しに作り上げてみる「単元習作」である。苅宿俊文・佐伯胖編『ワークショップと学び』第1巻(東大出版会, 2012)が IFEL や大照完『教師のワークショップ』(教育問題調査所, 1950)等を紹介するが、本研究では歴史をさらに全面的に研究し現在に活用したい。村川雅弘編著『授業にいかす教師がいきるワークショップ型研修のすすめ』(ぎょうせい, 2005)も戦後初期について言及するが、本研究は「単元習作」他に焦点を定める学術研究となる。

2. 研究の目的

カリキュラムを実際に構成するワークショップ(例えば、数時間の連続した授業を参加者で計画してみる「単元習作」など)について、その意義や方法に関する理論を構築する。

その参考となるように、戦後初期のコア・カリキュラム他を研究し、並行してワークショップや教員サークル等に参加する。そして実際にワークショップを企画・実践する。

本研究では、カリキュラムをまず「子どもの学びと生活の履歴」と捉え、その意味でのカリキュラムを支援するための、行政、学校、教師の側のカリキュラムを、次の4つの相に分けて把握し、作業仮説として活用する。

カリキュラム基準、カリキュラム計画、(=ともに教育課程と言い換えられる。)
カリキュラム実践(=授業などの実践)、
(教師の)カリキュラム経験(=教職歴、力量形成)

このうちとくに、各校、各学級のカリキュラム計画(一時間の授業だけでなく、単元など数週間、学期、年間にわたる長期プラン)に焦点を合わせ、それを作成する力量(「カリキュラム構成力」。カリキュラム経験の一

要素)を養う場面を、ワークショップなどとして企画し、実践するわけである。

3. 研究の方法

1) 戦後初期のコア・カリキュラムと三層四領域に関するカリキュラムの冊子類(カリキュラム冊子、研究紀要、指導案集ほか)の閲覧・収集、および元教師と教え子へのインタビューと、それらを活用した研究を行う。

2) 教員研修の全国的な研究集会、地域サークル他、また NPO などのワークショップ・講座にも参加し、その知見を蓄積・分析・活用して、「単元習作」などワークショップを企画・実践する。

3) 以上のための資源として、ワークショップ論、教育学・社会科学などの文献を広く収集し、読解・活用する。以上の冊子類、インタビュー記録、文献を、自分の検索・整理と他の研究者の利用にも資するよう配架する。

4. 研究成果

1) 先の2度の科研費を活用して進めてきたコア・カリキュラム研究を再構成したり、新たに進展させたりすることができ、学術論文を数本執筆した。

その研究で得た知見が総合学習、カリキュラム、学力、学習指導要領などの分析に活用できるとわかり、雑誌論文や共著、大学テキスト、学会発表原稿などを仕上げた。他にも学力テストやテスト全般を、生活科・総合学習や教師の自主的な授業案・単元案づくりを阻害するものとして検討・批判する論文、その対案ともなりうる中学校での出前ワークショップの報告文、かつ実践記録を書くこと自体や共同で検討・討議することの意義についてや研究集会の分科会での実践記録検討を通じて得られた諸視点についての雑誌論文なども書き上げた。

長年の懸案であった三度目のコア・カリキュラムの史資料調査の依頼を、学校や教育研究所・センターに対して試みたものの、新たな資料の発見には至らなかった。

2) 学会大会、教員団体の合宿、教育とそれ以外も含む研究会・講演会・シンポジウム、ワークショップ、イベント企画の講座などに、科研費を使用しないものも含めると毎年100件以上4年間で総計500件以上に参加した。それらでは、有益な史資料・情報や人脈、視点・発想、知見などが得られた。これらに参加する過程で見えてきたことは、社会的な問題に関するワークショップやイベントについては、大学教員以外の市民層こそ豊かな知見を蓄積してきており、それらを学びとれる企画への参加と自らによる企画自体が、市民との協同活動に、かつ学問の質を転換する研究実践になり得る、ということである。

そうした経験も生かして、単元づくりのワークショップを企画し、10回以上にわたって

実践してきた。その発想・意義、および経緯ほかを二件の文章にまとめ、現場教員の読む雑誌に発表できた。そうした過程で、カリキュラム構成ワークショップと呼んでいたものを、「単元習作ワークショップ」と呼び直した方が内実をよく表すし、教員にはわかりやすいとわかってきた。この「創る」に至る作業のセットが教育関係の講演会の常道になるべきという理想像が描けてきた。教員の夏季研究集会の中で試みた際には、分科会での実践記録の報告と討議に続けて、参加者が共同しすぐに単元案を作ってみるという方式を編み出した。ある会他では講師を務めつつ、未来の教育シナリオを参考にアクションプランを立てるワークショップといった新しい方式も試みた。

こうしたワークショップに参加した経験をもとに、自分の学級で後日に実践に移した教員も現われた。さらに、大和市立のある小学校では、研修および来期の計画づくりとして、単元習作を企画・実施でき、現場を会場としたワークショップへのさらなる展開を展望することができた。

以上を通じて、ワークショップの企画と運営をしての現実問題、それらを考察する際の理論課題などを箇条書きメモとして蓄積できたし、私自身、企画と運営の力量も形成することができた。学校教育と、市民の生涯学習、社会教育、地域活動などとの連続性をも見通して、共通しうる一般問題を挙げることもできた。歴史上の前例を発掘し理論的に考察する論文の吟味も通じて、まとめを試みた。

実践的にはさらに、大学の講義、例えば初等生活科教育法、初等社会科教育法などの科目の中で、学生にも単元習作を経験させることを試みた。現場に即した問題提起とワークショップ的な方法論の提示をすることで、かなり高い水準の単元を習作する学生も現われることがわかった。

ワークショップの発想や手法の一つとして、システム思考というものを発見することができた。ドネラ・H・メドウズらのシステム論に関する理論的な整理を含んだ論文を執筆し、社会思想史演習Bという科目にシステム思考のワークショップを導入した。社会人にはその理論の説明に数時間は要するといわれるものを、エッセンスとなる実習と要約的な資料をうまく活用することで、学生たちには短時間で理解させられた。上記の諸企画で得た資料やその知見を系統的に整理しておき、適切なタイミングで話したり読ませたりすることで、高水準のシステム図と改革案が構築できるとわかったのである。

3) 参考文献の整備を進めた。教育学関連と隣接する諸分野の文献購入と、臨機応変に活用していくための従来所蔵分も含めた分類整理・配架を、リソースセンター(横浜国立大学教育人間科学部・生活科教育講座内)ほかにおいて行なった。この過程自体が意義深

いものと気づいた。すなわち文献整理とは、研究者に限らぬ市民を含めた先人たちの豊かな知見を整理・分析し、継承・発展させる活動であり、また、コア・カリキュラムのように、コア的な活動を展開するために必要となりそうな情報、資料などを、あらかじめ整理しておくという研究兼実践といえる活動の一環なのだ、という理論的な気づきをもった。

ワークショップの資料と題材を積極的に探索するなかで、文献以上に生きた情報と資料を得るため、キューバの諸学校・教育大学、および南フランスのフレネ学校においてフィールドワークやインタビューなどを行なった。報告会を兼ねたワークショップを開くとともに、次なる企画・実践運営・考察・研究に向けた足掛かりが得られた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計17件)

「単元習作ワークショップ」の提案(金馬国晴),生活科教育研究会『生活科の探究』109号(1頁)2016年,査読無し
教科・活動・能力のトリレンマ-能力表・要素表と北条小学校を中心に-(金馬国晴),日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』41巻(61-72頁)2016年,査読有り
問題解決学習「西陣織」・「水害と市政」の再評価 コア・カリキュラムおよび全面主義道徳との関連から(金馬国晴),『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学』18巻(20-37頁)2016年,査読無し
非対称なものとの間の場としての境界-コア・カリキュラムを手がかりに(金馬国晴),日本質的心理学会『質的心理学フォーラム』8号(89-92頁)2016年,査読有り
授業案をその場で共同でデザインする-単元習作ワークショップ(金馬国晴),『生活教育』生活ジャーナル 67巻 794号(8-9頁)2015年,査読無し
ふりかえりに活かす実践記録とそのコア(金馬国晴),『生活教育』生活ジャーナル 795号(74-75頁)2015年,査読無し
ひとまとまりの協同活動としての総合学習-3.11後のシステム社会と生活世界(金馬国晴),『生活教育』生活ジャーナル 783号(30-36頁)2014年,査読無し
実践事例報告 開発教育教材の展開と深化~『コピール君ちの家族マップ』の開発を通して(東宏乃,金馬国晴),『開発教育』61号(136-143頁)2014年,査読無し
(他,9件)

[学会発表](計3件)

4相の連続関係としてのカリキュラム概

念 - コア・カリキュラムと三層論をめぐる元教師インタビューを手がかりに(金馬国晴), 日本カリキュラム学会, 昭和女子大学, 2015年7月4日

元教師インタビューによる戦後初期コア・カリキュラムの再把握(金馬国晴), 日本オーラル・ヒストリー学会, 立教大学新座キャンパス, 2013年7月28日
(他, 1件)

〔図書〕(計2件)

学力と学校を問い直す(教育科学研究会編, 金馬国晴ほか), かもがわ出版(295-299頁)2014年

教育方法論(広石英記, 金馬国晴, 遠藤貴広, 藤本和久, 田尻敦子ほか), 一藝社(51-78頁)2014年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金馬国晴(Kuniharu KIMMA)

横浜国立大学・教育人間科学部(大学院教育学研究科)・准教授

研究者番号: 90367277